

IFERI 講演会

「明治期日本における国語概念と言語イデオロギー」

報告

1. 開催日時 2010年9月15日(水) 6時限 (16:45-18:00)
2. 会場 人文社会学系棟 B620
3. 主催 人文社会科学研究科インターファカルティ教育研究イニシアティブ (IFERI)
4. 講師 Luka Culiberg 氏 (スロヴェニア共和国リュブリャナ大学文学部講師)
5. 参加者 12名

講師の Culiberg 氏は「国語」という概念の問題に着目して、社会学、言語学、哲学などの多様な観点から興味深い研究をなさっている。今回、IFERI 主催「南東欧・日本学生知的交流会議」の開催に係って来日中のところ、主に大学院生を対象として、ご自身の研究成果の一部についてお話しいただいた。

当日は残暑が大変厳しい中にもかかわらず、人文社会科学研究科のさまざまな分野の学生、教職員、さらに人間総合科学研究科の学生も参集して下さったことは幸いだった。ご講演後には参加者とのディスカッションの時間が設けられ、自由な意見交換が行われた。ご講演内容の詳細は、次頁からの IFERI プログラム生によるレポートを参照されたい。

The analysis of kokugo concept and language ideologies in Meiji Japan

Luka Culiberg 先生

9月15日に筑波大学で行われた Luka Culiberg 先生の御講演 “The analysis of kokugo concept and language ideologies in Meiji Japan” の主要テーマは、1) 国家概念と国語の間にある関係に関する議論、2) 明治時代の言語観念に関する議論、3) 言語と国民意識の関係を説明する理論モデルの提案、である。

まず、Luka 先生は国家と国語をどちらも心的概念として扱うべきだと考える。その観点から、日本独自の精神を追求する「国学」や西洋言語学の科学的方法論を取り入れ、言語を “spiritual blood of the nation” と定義した上田萬年の「新国学」といった国語研究、「漢字御廃止之議（前島密）」や「言文一致」などの言語政策から江戸期から明治期にかけての知識人たちの国語観念に対する葛藤を見た。そして、それらが「漢字」、「漢文」への批判であったことを確認した。

Luka 先生は、日本の国家・国語概念の形成過程は話し言葉を中心にすえる考え方から形成されたと説明する。話し言葉中心主義は18世紀の国学者本居宣長の日本書紀と古事記の対比に見ることのできる古代日本の話し言葉の復権に現れている。古語、書き言葉、正確なことばを模索することは国語の形成につながり、延いては言語社会、つまり、国家の形成へとつながるのである。しかしその一方で、国粹主義の指導的観念形成はそれ以降の国語概念を矛盾する形で作っていったともいえる。

英語の理解に不安があるが、講演を聴いて考えたことを記したい。

疑問点

(江戸期ではあるが、) 本居宣長の国学に関しては、やはり知識人の国語・日本語観というイメージがある。国学の立場に立ったとき、どの身分までが日本国家の内包になるのか、ということを見るとこれも国家と切り離せない国語という観点から見た日本語とはいえないだろう。

一方で、上田萬年の “spiritual blood of the nation” という言語の定義が日本という国家とその国語の成立を考えていく中で重要であることは理解できた。しかし、これはある意味で西欧的な概念と観点で日本と日本語を捉えるということになってしまうのではないだろうか。この観点がその後の日本の言語政策に影響を与えているなら、それはあくまで西欧の模倣であり、日本国民の外延を決める要素となるのか。

Puyo Baptitste
筑波大学人文社会科学研究科
文芸言語専攻フランス語学領域
一貫制修士課程一年次

The analysis of kokugo concept and language ideologies in Meiji Japan
Luka Culiberg
2010/09/15 University of Tsukuba

Luka Culiberg made us the honour to come to Tsukuba University to talk about the relationship between the concepts of nation and language, focusing on the analysis of the language ideologies in Meiji Japan.

The main idea is that both language and nation concepts should be considered as meaningless concepts. Language and nation are constructed ideological concepts. In Japan, the language ideology of kokugaku developed in pre-Meiji by Motoori Norinaga is based on a pure vision of the Japanese language.

But, on the contrary, many reforms (limiting the number of kanji ; use of phonetic kana script ; adoption of Roman alphabet ; genbun itchi) were involved to criticize the kanji compounds and kanbun. For Luka Culiberg, there is no contradiction here. Phonocentrism was already present within the kokugaku in the eighteenth century, which saw its ultimate expression in Motoori Norinaga who opposed the Nihon shoki, written in Chinese characters, with the Kojiki, which appeared to preserve the spoken language of ancient Japan.

The idea of nationalism appeared in Japan with the movement for a phonetic writing of Chinese characters and with the ideology of phono-centrism, which conceives Japanese language as a homogeneous system that belongs to all individual of the imagined linguistic group.

The thesis of Luka Culiberg is that the arguments for the language reforms, rejecting kanji and kanbun, and the arguments for traditional orthography are not opposing but actually sought to sever the past from the present.

Dialectical process in which nations and languages emerged can be interpreted as the process in which phono centric view gave birth to the idea of vernacular conceived as language and therefore the idea of nation, while on the other hand the hegemonic ideology of nationalism started to shape all following ideas of language.

「明治期日本における国語概念と言語イデオロギー」を聞いて

人文社会科学研究科 文芸・言語専攻
林始恩（イム・シウン）

ルカ先生の発表のポイントとしては、国家の国語の概念の関係性について、日本明治時代の言語イデオロギーについて、言語と国家の関係を説明する理論についてであった。特に、明治時代の言語イデオロギーに関して様々な背景を説明して下さったが、韓国の言語イデオロギーとも関連しているところがあり、印象深く聞いた。

韓国も同じ漢字文化圏であり、日本と共通しているところが多い。また、日本とは違う歴史背景の中、韓国独特の言語イデオロギーを持つ部分もある。以下では、韓国の朝鮮時代(1392~1910)や近代の言語イデオロギーについて思い浮かべたことを取り上げてみる。

ハングルの創製背景

韓国固有の表記文字である「ハングル」は、明治時代の日本の言語イデオロギーと似たような背景で作られた。ハングルは、世宗（セジョン）王が、1443年（1446年頒布）固有の文字がない状況での国民の不便さと、他の国の文字を使うという恥辱を克服するため作られた。当時、韓国も話し言葉があったのに対し、書き言葉は漢字であったため、読み書きができなかった庶民が多かった。世宗王は、言文一致を目指し、科学者を起用しハングルを作らせた。創られた初期の頃は、地位が低い庶民や女の人たちから使い始めたが、次第に使用率が増え、やがて近代には全国民が使うようになった。

日本支配時代の韓国語（朝鮮語）

1910年から1945年まで、韓国が日本の植民地だった時代、日本は、朝鮮民族の文化を抹殺するために、強制的に日本語を習わせ、韓国語をなくそうとしていた。そして、学校教育は、日本語で行っていた。しかし、抗日意識が強い朝鮮民族は、国語を守ろうという意志が強かったため、夜には密かに別に集まって、韓国語（朝鮮語）の勉強をしていた。このように、植民地時代、国語を守ろうとする強い意識は、国語とナショナリズムの関連付けられる代表的な例であろう。

その他にも、在日朝鮮族の問題がある。日本や他の海外に住んでいる朝鮮民族は、「母語 = 母国語 = 民族 = 国家」が当てはまらないため、国語ナショナリズムについて再度考える必要性があるということである。

今回の講演を通して、「国語」の概念が民族とどのような関連性があるのか考える契機となり、また、言語の影響力の強さを実感できた。